

The Journal of Tokyo Medical Association

TMA

医師と東京都医師会を結ぶ会報誌

9

2026 VOL.79
NO.8

言葉の前にあるもの



東京大学
先端科学技術研究センター
動物言語学分野 准教授
鈴木俊貴



東京都医師会
会長
尾崎治夫

言葉の前

東京大学 先端科学技術研究センター
動物言語学分野 准教授

鈴木俊貴



古代ギリシャ時代から現代まで、言葉を持つのは人間だけだと考えられてきました。しかし、シジュウカラという鳥が言葉話すことを突き止め、有史以来の常識や決めつけを打ち破ったのが東京大学先端科学技術研究センターの鈴木俊貴准教授です。世界で初めて人間以外の動物に言語能力があることを発見し、「動物言語学」という新しい学問を提唱して、動物たちの言葉を解き明かす研究に取り組まれています。📖

にあるもの

東京都医師会
会長

尾崎 治夫

今回の尾崎治夫会長との特別対談では、鈴木准教授の研究の原点を伺いながら、言語と医療との接点に迫りました。超高齢社会・AI時代の今、医療・介護分野の課題は山積しています。コミュニケーションは、医師と患者の信頼関係の構築を通じて医療の質を担保する根幹的な要素であり、また医療者同士においても多職種連携や地域連携を支える基盤と言えるものです。言葉とは何か、コミュニケーションの本質、課題多き現代社会で問われる共感や信頼関係のあり方など、多角的な視点で今後を展望しました。お互いの専門性から交わした“言葉たち”を、今号と次号10月号の2回にわたってお届けします。

対談日：2026年7月3日 東京大学 先端科学技術研究センター 鈴木研究室にて



01 人間の言葉と動物の言葉を対等に比較することで初めて言語獲得の原理解明につながる

尾崎 まずは「言葉とは何か」についてから話をはじめたいと思います。鈴木先生はなぜシジュウカラの鳴き声が「言葉」であると気づかれたのでしょうか。最初に発見されたときのことを教えてください。

鈴木 実は観察していて「言葉を喋っている」と突然気づいたわけではないんです。私は子どもの頃から生き物が好きで、将来は生物学者や動物学者になりたいと思っていました。高校生の時双眼鏡を買って鳥の観察が面白くなり、大学で研究対象を探す中で、シジュウカラが他の鳥に比べて発音のパターンが非常に多いことに気づいたのがはじまりです。

最初は「なぜこんなに多様な声を出すのだろう」という素朴な疑問から調査をはじめました。すると、デタラメに鳴いているのではなく、空にタカが現れたら「ヒヒヒ」、仲間を呼ぶときは「チチチチ」と、状況ごとに違う声を使い分けていることがわかったのです。そこから「それぞれの鳴き声に意味があるのかもしれない」と考えはじめました。研究を進めるうちに、「ジャージャー」はヘビに対してしか出さない声であることや、鳴き声を組み合わせた文章の存在などが見えてきました。それと並行して言語学や認知科学の本を読む中で、これまで学問界で信じられ

てきた「人間だけが言葉を持つ」という常識と、自分が現場で見ている世界との間に食い違いがあると感じ、本格的に探求へ踏み出しました。

尾崎 他の鳥は、そこまでバラエティに富んだ鳴き方はしないのですか。

鈴木 そうですね。例えばウグイスは、春の繁殖期に縄張りを主張する「ホーホケキョ」という声や、秋冬に自分の居場所を伝える「チャッチャツ」という声くらいしかパターンがありません。カラスでも6パターンほどですが、シジュウカラは200パターン以上あります。厳しく無駄のない自然界において、意味もなくそれだけのパターンが進化するはずがありません。

さらに研究を進めると、単語として概念に結びついた声があることや、ルールに則って言葉を組み合わせる力があることも判明しました。私たち人間がほぼ無限の言語表現を行えるのは言葉を組み合わせる力があるからですが、それが動物にもあると世界で初めてわかったのです。

尾崎 これまで鳥の発する声は、求愛や異性へのアピールのためのものとして研究されることが多かったようですが、シジュウカラの多種多様なパターンにはコミュニケーションとしての意味も含まれているのですね。



鈴木 鳥類学において、求愛や縄張り主張のための声は「さえずり(バードソング)」と呼ばれます。春を歌う美しい声で、50年ほど前から盛んに研究されてきました。しかし、それ以外の1年中発せられている声は「地鳴き」と一括りにされ、「お腹が空いている」「怖い」といった内面的な感情を表しているだけに過ぎないと思われていたのです。まさか天敵の種類を示す言葉になっていることや、それを組み合わせて文章を作れるとは誰も考えていませんでした。私のここ20年の研究で、その常識をアップデートできたと考えています。

地鳴きと一括りにせず丁寧に観察すると、シジュウカラの発話にはヘビを意味する「ジャージャー」や、「警戒して・集まれ」という二語文「ピーツピ・チチチチ」、さらにはジェスチャーまであることがわかりました。例えば、メスがオスに対して「お先に巣に入って」と伝える際には翼をパタパタと動かします。鳥がジェスチャーを使うことの証明も、世界初の発見でした。

尾崎 「動物は喋らない」という固定観念のせいで、何十年もの間、研究が止まっていたのですね。

鈴木 言葉は物事を理解するのに便利な反面、解釈を狭めたり、見えているも

のを見えなくさせてしまったりするリスクもあります。「偉い先生が動物は喋らないと言っているから」と決めつけず、丁寧に観察したからこそ解き明かしたのだと思います。

尾崎 そうした厳密な観察眼は、桐朋高等学校時代の生物部での活動で培われたのでしょうか。

鈴木 そうかもしれません。尾崎会長は同窓の先輩ですのご存じだと思いますが、母校は非常に自由な校風ですよね。生物部でも先生の引率なしで、生徒だけで勝手に目的地を決めて虫の採集や魚を探しに行っていました。先生が「こうだ」と決めつけて教えてくれなかったからこそ、自由な発想で自然を正しく観察して読み解く目が養われたのだと思います。また、観察だけではわからない部分を実験データで実証していくスタイルが身につきました。

尾崎 実験の際、飼育下の鳥では自然な行動をとってくれないと著書に書かれていました。

鈴木 全然してくれませんね。彼らは自分が飼われているとわかっているからです。

尾崎 やはり人間が自然の中に入り込んで観察することが大事なのでしょう。

鈴木 そうですね。これまで言語の進化

に興味を持った動物学者や人類学者は、人間に近い動物を野外から実験室に連れてきて人間の言葉を教えようとしてきました。1950年代のアメリカにいたチンパンジーの赤ちゃんのビッキーは有名な例です。人間の真似をして「パッパッ」「マamma」の子音は言えるけど、それと母音をつなげてはっきりと「パパ」「ママ」とは言えないんです。それで「喋れない」と結論づけてしまっ

私のスタンスは逆で、人間が彼らの住む森に入り、彼らの立場に立って彼らにとっての言葉を探求すべきだと考えています。研究室の学生にも「動物の目線になって世界に入る」ことを重視させています。これまで人間と自然を切り分けて考え、人間だけが言葉を喋れる特別な存在としてきた歴史がありますが、その見方は間違っていると思っています。人間もシジュウカラも、3億年前の共通祖先から同じ時間をかけてそれぞれの環境に最適な形へと進化した対等な存在です。人間を特別視せず動物の一種として相対化すると、初めて人間の言葉と動物の言葉を対等に比較できるようになります。そこから「どういう状況で言葉や文法、ジェスチャーが進化するのか」という、生命における言語獲得の根本的な原理を解き明かすことにつながると考えています。



02 人間にも本来、言葉を介さずとも 他者の感情を感じ取る能力が備わっている

鈴木 尾崎会長は医師という専門的なお立場にいらっしゃいますが、もともと言語や言語学といった分野に対して関心はお持ちだったのでしょうか。

尾崎 医学や医療の現場における「言葉」について、日頃から強く感じることがあります。医師は日常的に専門的な医学用語を使いますが、特に若いドクターなどに多く見られるのは、自分が理解している言葉だから患者さんにもそのまま伝わると思い込んでしまうケースです。

患者さんは説明を聞いてはいるもの

の、すべてを理解することは難しいものです。しかし、医師に質問すると怒られるかもしれない、わからない自分が悪いと遠慮して、「わかりました」と頷いて帰ってしまう。その後、私のところに来られて「病院でこう説明されたのですが、よくわからないので噛み砕いて教えてほしい」と相談されることが実は多いです。

医療界の関係者同士は、1つの概念を1つの専門的な言葉を使って意思疎通できる特殊な表現があり、それは非常に効率的です。しかし、患者さんと医

師の間には、言葉や知識の非対称性があります。同じ人間で同じ言葉を話していても、相手の身になって言葉を選ばないと伝わっていきません。言語の本質的な難しさを感じます。

鈴木 まさにそこが言葉の面白さであり、同時に大きな曖昧さでもありますね。私たちは、辞書を引けば言葉には絶対的な意味が存在するように錯覚しがちです。しかし実際には、人間は一人ひとりが自分自身の過去の体験や記憶にあてはめて言葉を解釈するしかありません。例えば「おふくろの味」と言ったとき、思い浮かべる料理や味付けは育った家庭によって異なります。

尾崎 みんなそれぞれで違いますね。

鈴木 「月」という一文字をとっても、世界に1つしかないのに、絵を描いたとしたら上弦の月なのか満月なのか、色も、周りの風景も、それまで見てきた月によってイメージはバラバラになります。言葉とは、それほどまでに曖昧なものです。

私は1年のうち10か月ほど森に入っ
て鳥の観察をしています。人間はす
ごく不思議な動物だと思います。これほ
ど曖昧な言葉というものを、目の前で
実際に起きている現実よりも優先して
しまうからです。かつて動物行動学者の
コンラート・ローレンツが「鳥は本能や
感情で鳴いているだけだ」と著書に書
いたことで、人々はそれが真実だと信
じ込み、誰も鳥の声を観察しなくなっ
てしまいました。人間は言葉に対して中
毒的に依存してしまっています。

尾崎 言葉への盲信が、現実を見る目を奪ってしまうわけですね。



鈴木 それが現代社会のあらゆるところに弊害をもたらしています。SNSにおける炎上や誹謗中傷は典型例です。発信者がそのような意図を持っていないのに、受け手が曖昧な言葉を自分なりの偏った解釈で受け止めて、ストレスを人にぶつけてしまうことがあるのが言葉の難しいところです。

インターネットや生成AIの普及でこの傾向が加速することにも懸念があります。疑問があればインターネットやAIに聞くと何かしらの答えが返ってくる、その言語情報を得ると誰もが安心してしまふ。そうして麻痺した結果、目の前のものを見なくなってしまう、自然を見なくなってしまう、その先の他者や人間の気持ちを察することができなくなってしまうのではないかと。

以前、料理研究家の土井善晴先生とテレビで共演させていただいた際、「本当の対話に言葉はいらない」とおっしゃっていたのが非常に印象的でした。言葉を介さずとも、同じ空間や時間を共有し、同じものを見て同じような感情を抱き、表情で共感する。これがコミュニケーションのベースにあるものです。人間以外の動物はみんなそれを実践しています。

例えばシジュウカラが警戒の声をあげると、リスはその声だけでなくシジュウカラの振る舞いまで観察し、「タカが来るから自分も身を隠そう」と察知します。彼らはそれほど他者を見ているわけです。現代がストレスフルな社会になっている背景には、言葉に依存するあまり、他者への共感が薄れている影響があるのかもしれない。これから、



言葉とは何かということを一ひたりが考える時代が来て、特に私の研究はそこにつながってくるように思います。

尾崎 鈴木先生の研究は、私たちが当たり前だと思っている言葉やコミュニケーションのあり方を根本から問い直す、大きなきっかけになりそうです。

鈴木 私自身、自分の研究を通してそう考えるようになりました。20年間にわたり1種の鳥を観察し続けるのは世界的にも珍しい研究だと思います。その中で気づいたのは、人間は言葉の曖昧さに振り回されて対立しているということ。先ほどの尾崎会長のお話にあったように、「医師の説明がわからない方が悪い」「知っている方が賢い」と考えてしまいがちです。でもそれは、その言葉に結びつく体験があったかどうかの差に過ぎません。鳥の世界でも、言葉は学習によって獲得されるので個体ごとに体験差が生じます。ただ、彼らは危険を回避したり、仲間と協力して子育てを成功させたりという明確な生存目的のために言葉を使います。たまに嘘もつくのですが。

人間は、他者を騙したり、傷つけたり、支配するために言葉を使うこともあ

ります。そうした人間社会で、医師の方々は言葉の難しさとのように向き合っておられるのですか。

尾崎 医療現場では、非言語のコミュニケーションや感じ取る能力は非常に重要な役割を果たしています。例えば、生まれたての赤ちゃんは言葉を話ませんが、親や周囲との間で感情を伝わっています。脳の障害による感覚性失語や重度の認知症によって言葉の意味がわからなくなってしまった患者さんであっても、表情や涙、笑いを通して感情や思いを伝え合うことができます。

かつて脳梗塞で全身が麻痺し、目しか動かせなくなった患者さんがいました。奥様が毎日のように病院に通って「あなた元気？」と声をかけ続けているうちに、最初は反応がなかった患者さんが、徐々に目を動かし、笑ったり涙を流したりして感情を表現されるようになったのです。土井先生の話に通じるものがありますが、言葉がなくても、時間と空間を共有し向き合い続けることで通じ合えるものがあると思います。

また、医師は患者さんが診察室に入ってきた瞬間から立ち居振る舞いや表情、全体の雰囲気など、言葉以外の



情報も見えています。例えば、定期的に通院されている患者さんで「特に変わりないです」とおっしゃっていても、違和感を覚えて念のため心電図をとると、自覚症状のない心筋梗塞を起こしていたというケースはあります。反対に、体調の悪さを必死に訴えられていても緊急性がないこともあります。言葉にならないサインをいかに察知するかは命の危険に直結します。

鈴木 まさに私が行っている研究そのものですね。決めつけや先入観を捨てて、相手の表情や仕草をきちんと観察して状態を探る、言葉に惑わされずに他者の気持ちに向き合うことの重要性を感じました。

私の祖母は2018年に誤嚥性肺炎で亡くなったのですが、当時私は連日病院に通っていました。祖母は声が出せない状態でしたが、ちょっとした動きや目線から「はい」「いいえ」の意思表示や「ありがとう」と言いたいことがわかり、感情を共有できたことを今、思い出しました。医療や介護の現場においても、言葉にならない部分にとっても本質的で大切な情報があるように感じます。

尾崎 やはり人間にも、言葉を使ったコミュニケーションだけではなく、言語を介さずとも他者の状態や感情を感じ取る能力が本来備わっているのでしょうか。

鈴木 そう思います。むしろ、過剰に発達してしまった言葉という存在が、その鋭い感受性を邪魔してしまっているとさえ感じます。



03 言葉の前にまず人間性や思いやりがあり、その思いを伝えるために言葉を使う

尾崎 命を預かる医療においては、特に言葉の奥にある情報を察知する能力を研ぎ澄まさなければなりません。共感し合うことは医療現場での信頼関係の構築に欠かせませんが、動物の世界でも助け合いや子育てにつながっていると思います。この共感言葉によって生まれるのか、言葉以前にあるのか、鈴木先生はどうお考えでしょうか。

鈴木 共感や信頼関係を生む上で、私は「同じ動作や音楽の同期」が非常に重要だと考えています。例えば、私たちの出身校が同じだと嬉しいじゃないですか。それだけでなく、人間は同じ動きをするだけで心が通じ合い嬉しくなって、共感するようになっています。ダンスや歌のように、同じ場所で同じ動きを共有することが絆や信頼関係を深めて、共感性が増します。これはマウスの実験でも確認されていますし、

カイツブリという水鳥もペアで複雑なダンスを踊ることで絆を深めます。社会性のある群れをなす動物では、同じ行動を共にする方が言葉より遥かに強力な共感を生み出すと思います。医療の現場では、患者さんとの間でそうした工夫はあるのでしょうか。

尾崎 すぐに思い浮かぶのは小児科です。小さな子どもと同じ目線までしゃがんで話したり、「チクツとするよ」「トントンするね」といったオノマトペを使ったりして、子どもの理解力や不安な気持ちに合わせることがよくあります。

鈴木 よく「上から目線」と言いますが、この感覚は、動物の世界で体が大きく目線が上にある方が強いという本能からきていると思っています。ネズミも争うときは体を立てて威圧します。目線が上からだと、相手は恐怖を感じて本音を話さなく



なってしまう。だからこそ、人間社会でも目線を合わせるアプローチが重要なのですね。

尾崎 あえて白衣を着ないで、友だち同士のような服装や言葉遣いでリラックスさせて、本音を引き出すドクターもいます。また、ときには緩急をつけるテクニックも効果的です。最初に厳しく注意した後に「ここをもう少し頑張れば良くなるから、一緒にやろう」と温かい言葉をかけると、患者さんはとても喜んで信頼を寄せてくれます。単調に上から目線で医学用語を並べ立てるだけでは、氷を溶かすような信頼関係は生まれません。

鈴木 今のお話は動物の求愛行動にも通じますね。派手な鳥たちの求愛ダンスも単調ではなく、注意を引きつけてから重要なアプローチへと段階を踏むような緩急があります。強弱があるからこそ相手の

心を動かせるんです。コスタリカのマイコドリという鳥は、何年間も先輩鳥に弟子入りしてそのダンスやステップの技術を学びます。人間と動物のコミュニケーション手法はよく似ていますね。

尾崎 結局のところ、心まで動かすには言葉だけでは足りないように思います。例えば、心臓ペースメーカーの植え込みなどの手術には、心からの信頼関係が欠かせません。患者さんは体に機械を入れるわけですから非常に不安を覚えます。その患者さんに、「薬では治せない理由」や「良くなってほしい」という思いを熱意を持って伝えて信頼し合える関係ができていないと、手術直前になって拒否されてしまうこともあります。難しい専門用語を使って「徐脈の数値を整えます」と機械的に話すだけでは不十分です。

鈴木 それでは反発を生んでしまいます

し、信頼関係を築くことは本当に大事ですね。

尾崎 患者さんの体を本気で心配し、救いたいという思いを自分の言葉で伝えなければなりません。医師側の準備も重要です。前日には手術の手順やリスクへの対処法を何度も脳内シミュレーションし、完璧に復習して当日に臨みます。助けたい気持ちがあればそれは苦になりません。ただ、医師になって10年ほど経ち、30代半ばになると「自分は何でもできる」と慢心が生まれやすくなり、医療事故を引き起こすリスクになる。それを乗り越えて慎重さと人間性を深めていくことが大切です。大学病院などの組織でも、立場が上だからと若手の意見を聞かない「上から目線」になってしまえば、組織全体の向上は望めません。

鈴木 非常に示唆に富んだお話だと思います。言葉というツールを使う前に、まず一人の人間として患者さんや医療仲間とどう向き合うかという姿勢が問われている。その後に出てくる言葉が、人を助けることや組織を良くすることにつながっていく。「はじめに言葉ありき」ではなく、まず人間性や思いやりがあり、その思いを伝えるために言葉を使う。そこに本質があるのだと感じました。

尾崎 言葉について、コミュニケーションや共感について、異なる分野から貴重な意見を交わすことができ、私も新たな気づきや学びを得ることができました。言葉だけに盲信することなく、改めて東京都医師会は医療を担う組織としての言動を考えていきたいと思います。